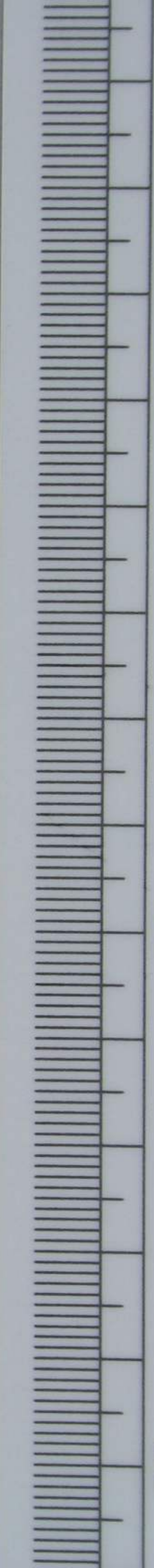
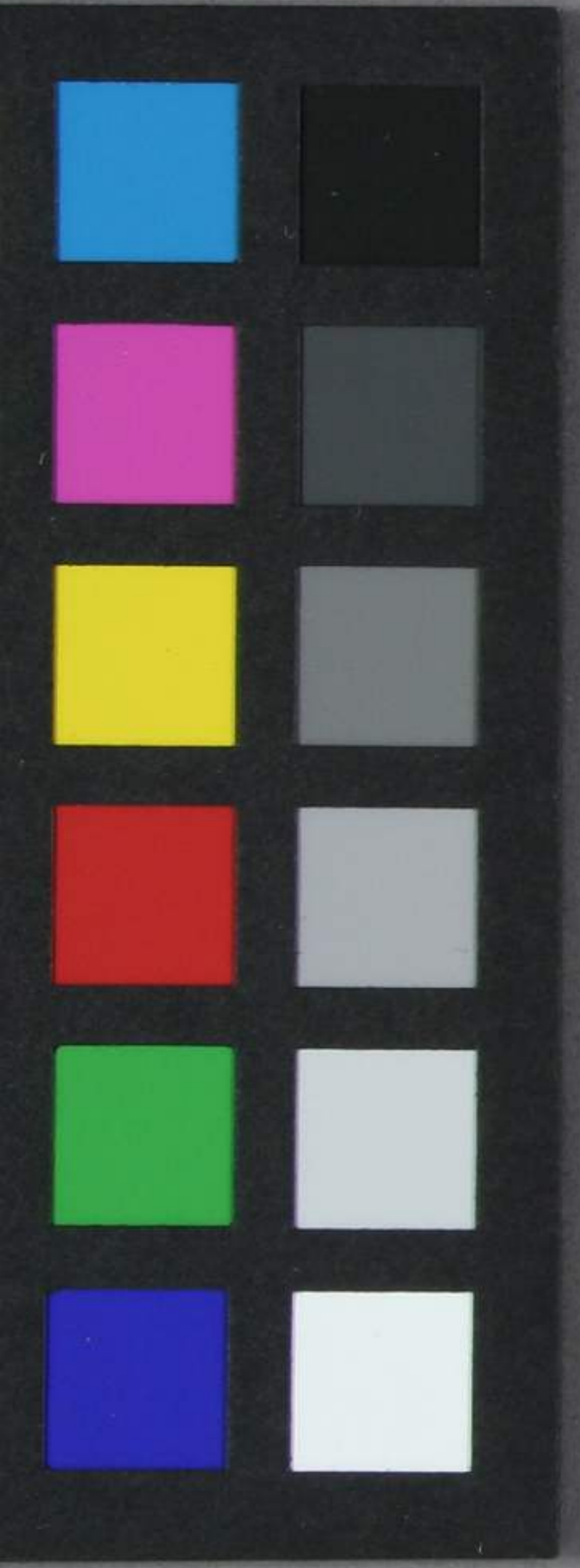


愛の鳥



55

60

65

愛の鳥
楓花作



人



愛の鳥

愛の鳥
楓花作



60

65

70

75

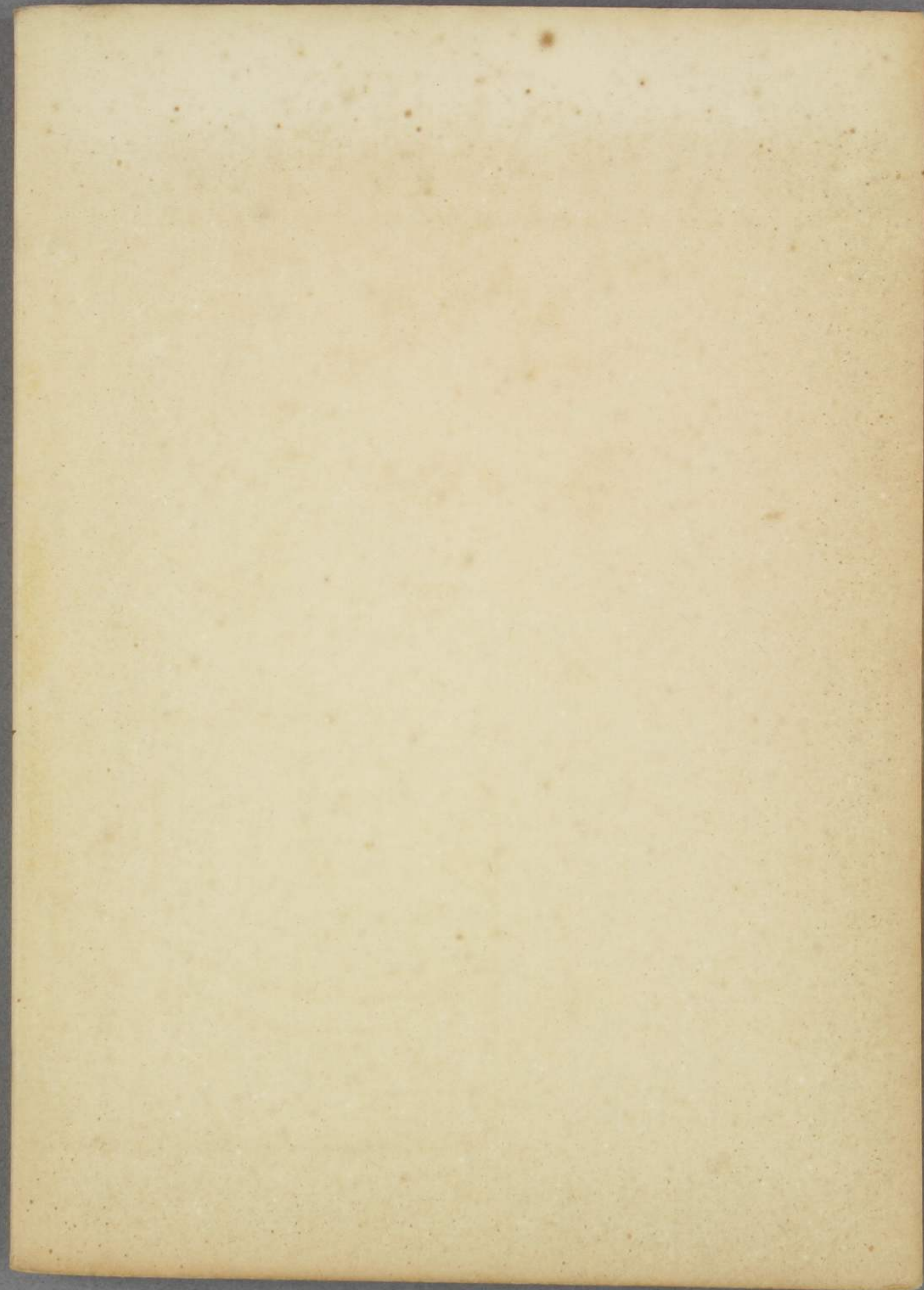
80

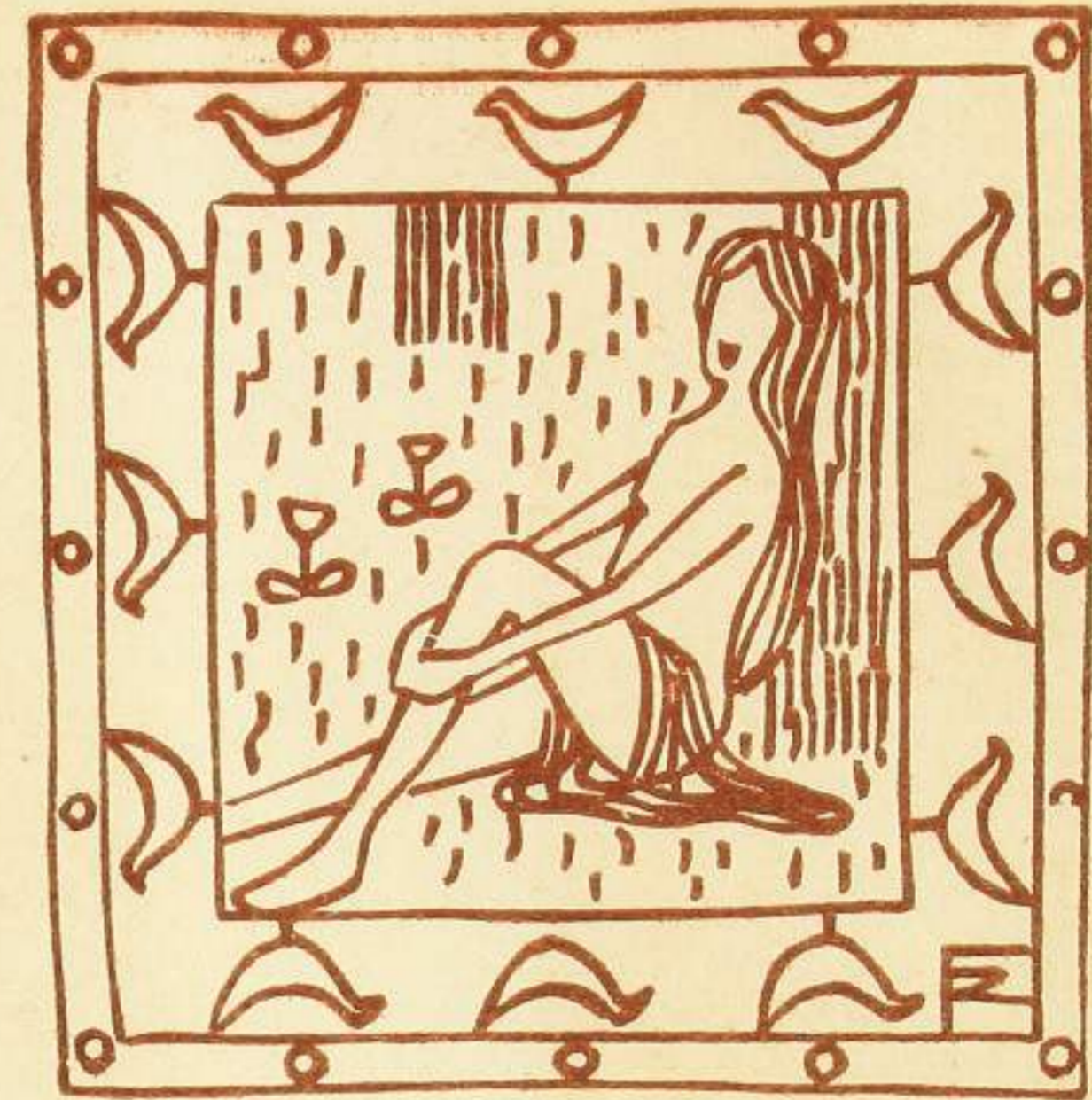
85

集 歌
鳥 の 愛
—
花 楓 田 百

歌集 愛の鳥







花楓田
鳥の



花楓田百
鳥の愛



矢澤夫人に献ぐ





矢澤夫人に献ぐ



愛の鳥

一

去りゆく少年を思ふ歌

四一

海峡より

四七

春

六一

短夜調

九五

濁れる花

一二五

愛の鳥



眠よりなかばはさめし瞳もて空をおも
へるわが愛の鳥

ここひさに醒めざる夢の夢のあらばゆ
かましゆきてまた人を見じ

下にのみ君を思いて若き日のたけりこ
ゝるをわが御^{ぎよ}せし馬

ひさすぢに疾驅し來るはつ秋の小鳥の
背の青いろの空

ふさこゝる吾にかへりぬかたはらの梢
に春をうたへる小鳥

名も知らぬ小鳥きたりてさへすれる梢
あかるみ野は夜さなる

あたいかし君はふくろの黒羽もてわが
若き身を包みたまへば

窓のもよ書も眠りてもよめにき逢ひえ
ぬひこの髪のほつれを

瞳を暝ぢよわれらが胸に相ひやくゆく
春ごろの空の輝き

初夏のやゝに暗みし空のもよ野に出で
ひさり花を摘むなり

君を遠くはなれこし身は少女子に交り
て夏の野の草に寐る

あゝ五月さつきそのうす青の衣ぬぎて草に寐
ばやな愛するひさよ

わがおもひいつしか君が上にあり雲の
ゆきゝを眺めけるうち

疾驅疾驅人をたづねて逢ひにゆくわが
奔放の馬のいなゝき

春の月流浪のひきは公園のベンチによ
りて君を夢みぬ

手をとりて何處にかゆくゆくさして國
なきわれら今日も逢へれど

夢うつゝわすれてやすく膝による戀び
この肩にかゝる月かな

わが思ふ君がねむれる二階家もうらや
はらかく月の包まむ

火のごときこゝろを押へたひらかに髪
の上なる月に見入りぬ

泣きつかれうらみつかれて柔くいつし
か夢に入る小さき鳥

咲き倦みし牡丹のなかに交りたる長髪
の子のうつくしきかな

かゝる夜も華かにして人あらむ戸の面
の草生雨しづかなり

犬三四重なり合ひて群れ狂ふ夜の空地
の月の白さよ

月にそむき別れの接吻キスを交すときまた
なく君の艶なりしかな

秋の朝なかばは夢のわが眸に戀しき磯
に波の寄る見ゆ

誘はれて瞳しづかに暝ぢられぬいつこ
ともなう夜の雨を聴く

階上の椅子にならびて思ふごち星みる
夜を啼くほさゝぎす

をちこちの山に流るゝ雲のあり九月の
原は露じめりして

伏目して昔ありみれば君もまた嘆ける
さまに夕海をみる

わすれたり君がこゝるもくる髪も肌の
にほひも白たゝむきも

くしけづる朝の姿を思ひつゝ、あかつきの野の草に臥すかな

黴臭き夏のころもを行李より取出す朝の新樹のそよぎ

こゝろよく笑まひて春にむかはまし君よ効なき涙すてなむ

春立てば街にかはるゝ馬車馬も野やし
たふらむ草萌ゆるころ

旅やかたその夜の君のみだれ髪なまめ
きしをば今もぞ思ふ

つかれたる君をたすけてこまやかに夕
日みだるゝ海ぎはをゆく

くちびるのたゞれ果つまでくちづけて
あらむはるかの海に日は落つ

わが君が髪にかざせる白ばらにまたも
涙を誘はれしかな

襟あしの白きが上に三四すぢ髪ほつれ
あり秋の灯のもこ

河岸の白楊ホプラを縫ひて走りゆく陣に白く
冴へたる月夜

あえかなる君が髪かな水のごさわがた
いむきにこぼれこぼるゝ

雪さけの水ながれよる舗石しきいしに赤電燈の
うつる春の夜

夜となれば裏の空地に綿を打つ男の唄
の細くさびしき

ほのかにも月あかりする部屋のさまう
かべて急に逢ひたくなりぬ

君が住むしづけき街の裏畑の菜の花に
降る晝の雨かな

かなしげに空に月照るわがなみだぬぐ
ひもあへず柱によれば

かぎりなく愛せよと云ふわがこゝる冷
たくぬよと云ふわがこゝる

ふと瞳夢よりさめて真夜中の冷たき壁
のわが影をみる

やはらはき春の光につゝまれて小鳥の
ごさく君は唄へり

やうやくに涙あふれぬ別れきて君が言
葉を胸に畫くとき

いささびし黒土こくどの畑にさゝやかなの紫蘇
をながめて君をおもへば

紫蘇の花わづかに咲ける黒土を眺むる
に日の暮れにけるかな

手をとりて死なば死ぬべき斷崖きりぎしに君と
ならびて海をみるかな

おどろかず抱かれし身を吾に寄すうつ
くしき子よ吾を思ふや

君のせし電車のあとの砂ほこり身に浴
びて立つ春のゆふぐれ

かはりなく今日みる街もにぎはへり別
れし人の姿またみす

涙ぐみ衣ぬふこににか、づらふ君の姿
の見へてさびしき

高く歌ふ壯んなる子にしたがひて物思
ふ子はうなだれてゆく

やゝしばし君と逢はざりかの部屋の黄
の朝顔の花のなつかし

カーテンを透して海の風匂ふ身を長椅
子によこたへしとき

月の夜の明けがた近く窓により君のな
さけをしみぐ思ひぬ

戸によりてくれゆく秋のそらをみるな
やましげなる君が髪かな

たはぶれに溺れむと云ふ君が瞳もあは
れにみゆる初秋の海

あかあかさ塔にかやく黄色の入日の
もとの青草に立つ

あざむかれあざむき事もあらぬがに戀
の山河を歩みこしかな

若うしてよりごころなき身となりぬ陶
然として君に捲かる

しめやかに語る灯かけを思ひつゝ、寐さ
めてひっそり両腕を組む

悲しめる少女のごとく底知れぬ冷たき
床に夜半を寐ざむる

やすらかに獨り寐たまふ姿などゑがき
つ夜半を寐ざめてありけり

夢さめてまたあらたなる夢に入るわが
世のかぎり迷ひさめざり

大風す君が眠れる家の裏の空地の夜を
思ひうかべぬ

ひむがしにわづかにみゆる月かけのさ
びしき夜半の家を出でける

白^ホ楊^ラもアークもあらぬ河岸に別れこし
子は悄然と居る

手を當つれば石よりもはた冷たかる胸
の思ひのたへがたき夜半

れすみ啼くしづかなる夜の点滴の音に
交りて厨の方に

空をわたる月みつめつゝやゝしばし人
を忘れぬ君よ手をされ

波白くゆふべを風のみだれ吹く伊勢の
なぎさの冬をしる思ふ

世を忍び戀する身こそ悲しけれ葉月の
夜の星のまたゝき

春の日の若草の上にもるびつゝ、人を思
ふはこゝちよきかな

夏の夜の堀割の水をくだりゆく船頭の
子の悲しかる唄

ものありて逢ひがたうするなからひの
悲し堀こるの白き夏花

道ゆけば髪よき人とはたと逢ふはじめ
て君の遠きを思ふ

ある宵の少女に似たる君が所作うち
がきつゝ窓によるかな

つゞ来るたれし赤きくちびるに吸は
れしづかに瞳は夢に入る

さ笑へば君もしづかに頬をくづす灯か
げのひさの華やかさかな

窓の面の夜の樹々を打つ風の音にひさ
しく涙誘はれしひさ

君がりに通ふに馴れし冬の夜の水道ば
たに仰ぐ月かな

たそがれの旅籠の欄に君さあり暮れゆ
く大堰おほい水しづかなり

君が敷くかひなに通ふ水の音をまたな
きものに思ひ寐しかな

瞳を眠ちてふたゝび見じと誓ひける矢
のごとく君を厭へるこゝる

ふるさとの大木のかげのゆふぐれに蚊
が唸るさまのみゆる八月

雨過ぎて遠いかづちのさるきの涼し
く空に星ある夜なり

うなだれて涙ぐみたる君の背よかなし
く今日も夜となりぬる

ゆらくさ舟のへさきに破れたるかは
たれどきの水の黄のいる

ゆふぐれの渚に近く走りすぐ白波にう
つる淡き月がけ

まんまんと潮みなぎりしわだつみの涯
星ありまた、きもせず

瑠璃いろのそらさ水さにさかひしてわ
が悲しみの一線のみゆ

別れきぬ額に残る春の日のそのいたま
しきこゝちながらに

胸に手を置きて寐れども人の來す夜半
の寐ざめのさびしかりけり

しらくさ月あかりせる春の夜の運河
をくだる青き船の灯

そよかぜは頬をかすめぬうたゝねすわ
が かたはらに月のしたゝる

清き夢あさましき夢獨り寝る床をめぐ
りて立てるまぼろし

公園の夜の電燈に照さるゝ眞白き池の
水草の花

冬の日の小高き丘に伏してきく街道を
ゆく車のひゞき

松かけの丘のなかばの草に臥し思はるゝ
身をやすしとおもふ

野はづれに瞳を掩はれし馬車馬のさび
しく草を食めるに逢ぬる

いつしかに雲のみなぎり掩はれし今宵
の月を思ふ灯のもこ

蚯蚓啼く戸の面の溝に夏の夜の月のひ
かりの淡うてるかな

小楊枝をはさむ左手の紅さしの指輪に
白き春の夜の瓦斯

ゆふぐれの齒のいたみより身に沁みて
あたゝかなりし言葉を思ふ

月あかりほのかに黄ばむ二階家のです
りに君が待てるまなざし

去りゆく少年を思ふ歌

晴れわたる空のなかなる一すぢの道を
し仰ぐ君が腕より

たらちねに別れ夢よりわかれゆくたゆ
き瞳にぞつる大ざら

遠きよりみてよるこびし春秋の花の悲
しみ身に觸れてきぬ

瞳にうつるものあらたなり吾による君
が腕もやゝに冷たし

そこひさにまた汝が手にかへることな
き身となりぬ少年のゆめ

君に生きてらちねにのみ生きてこしや
すかりし身に吹きそむる風

うしろより吾を呼ぶものひけるもの前
よりしげく吾誘ふ聲

君が手をとりてさらなる空をみるわが
たましひの赤のあけぼの

ここひさに忘られたき繪となりてわ
が若き日の夢や残らむ

やはらかく身にまさはれしうす衣その
うすごろもいつか忘れむ

夢の夜の花さのみまし答へせず追へど
むなしきわがうしろかけ

ゆく道は茫漠として雲に似る捕へもか
ぬるわが身明日の日

すぎてこし少年の夢春のゆめみのこし
いもの、あるこゝちかな

少年の物思ひなき身をよせしやすらか
なりし昨のたゝむき

海峡より

淡路岩屋にて詠める

はるかなる水平にみゆ散り散れる落葉
のごとき白鳥のむれ

48

突き出でし堤防風のあたりより鷗啼き
出づ雲白き晝

松生ふるきりぎしに立ちゆふぐれの淡
路の島に寄る波をみる

海ぎはの岩かけに生ふる穂すゝきの穂
をなびかせて秋風ぞ吹く

49

あかつきの淡路の海の砂濱のあげすて
舟にくだけかけの啼く

波の音聴きつゝあればいつこなう人の
姿の瞳に充つるかな

停車場の床几によりて砂山のあひだに
光る白晝の海みる (二首途にて)

渚邊にひたく寄する晝の海のうしほ
をみつゝわが汽車はゆく

たそがれの湯殿の窓を開放ち海に落ち
ゆく目をばみおくる

君すてゝ淡路の海の波の音をひさり聴
く夜さなりにけるかな

残しこし戀しきひさの髪おもふ淡路の
宿の夜のあられかな

怨み泣く君の姿のそるにも胸に湧く
日は離れて遠き

風ぎはてしまひるの海の波ぎはにうづ
くまりぬて人を思ひぬ

寂然と火鉢をかへ月によりて淡路の
海の遠鳴りを聴く

青ざめし額を掩ふたなごこの冷たきに
涙あふれ出るかな

蒲團なごつみたる船の片すみに物思ひ
つゝ淡路にわたる

淡路なる繪島が岩の松に倚り死にも得
ぬ身をあはれみしかな

そゞるにも海にのがれて來は來つれ迷
ふこゝるはなほふるべなく

ひさふしに海は濁れりわがこゝる誘ふ
ものを今日も見出でず

迷ひ來しを汝も冷たきものなりしいつ
くに行かむ海を見捨て

明石にて詠める

君さある海のやかたをめぐり鳴る大風
の夜の波の音かな

遠く近く淡路島みゆさゞるきてやかた
の欄に寄する白波

いつしかに無言さばなる海みゆるやか
たの欄に君さよるとき

朝の海昨夜の名残りの風荒れてあはれ
一羽の白鳥をみす

白き帆のひさつ危くすべりゆく海峡の
午後の空に湧く雲

海をみてまた湧き出づるかなしさのた
へがたき身を君によせける

なやましく瞳を瞑ちたまふ姿をばめぐ
りて鳴れる暗瞻の海

ながき夜の無限の闇の海邊に波がしら
のみ白かりしかな

淡路島岩屋の浦のさもし灯の波のあひ
だにみゆるかなしさ

海ぎはにわが残りゆく足跡を消して引
きゆくゆふぐれの波

固く固くいだけよ海をみる眸にいつし
か涙あふれながる

雨にきて雨に去りゆく海ぎはのさびし
き家にひさ夜すぐしつ

しぐれきぬ君をたすけて石段の落葉そ
ろろに踏みゆく時 (人丸神社)

雨傘さして君さ歩めば音立てぬなつか
しきかな海邊の貝も

君こそその夜ならびていれし浪まくら海
鳴の音も高かりしかな

見へ隠れ君が縫ひゆく海濱の松の木の間
間に曇りたる空

春

こゝるみに抱きて波に入るさせむ君瞳
を瞑ぢてわが方によれ

みじか夜の明けそむるころしみぐさ
君のなさけの身にしみしかな

あなおかし月のしづくにあらざるやこ
もせば涙頬につたひくる

波の音海の風にもおどるきていくたび
君を離れける子ご

いつ知らすいだきしまゝに夢に入る海
鳴る音にまぎれまぎれて

寄邊なきひさりさなりてかの海の鷗の
ごさく空をゆかまし

春の花咲きそめにけりいたましきたま
しひはなほよるさころなし

物思ひあはれ盡きなく春立ちていと若
やかに花は咲けども

傷つきしわがたましひのゆくさころた
りりんの花も匂はず

ふたゝひは歸りきたらぬごさくわれ都
をのがれ大海にゆく

なぐさまぬこゝるを押へかざしみる晝
の日かけの花月見草

水際の暗きに座して君とみるうしろの
森の上の月の出

夕ざればあかあかとして灯の、ぼり岬
にひさり燈臺ぞ立つ

青ぞらのなかにさびしくそびへたる燈
臺下に白き波よる

青々と草萌へ出でし土手のもこ海あり
ゆふべ汐の充ちくる

柔き草生のなかに投げ出す身にまつは
れる淡き思ひ出

見る人もなき砂山のかげに入りつと交
してし接吻が身にしむ

手をさりてあげすて舟のかげに入る夜
の砂濱に蟲光るなり

いつしかに夜さなり野にも倦みてきぬ
はるかに街の灯あかりのみゆ

月の夜のわれらの影を見送れる濱の女
の緋のいろの帯

住の江の磯に通へるひさすぢの小徑の
蘆に風わたるゆふべ

こゝろいまうら若草の萌へ出づる野を
ば思へり君と待つ春

くちづけを強ひたるあさの灯の白さ君
しづやかに瞳を瞑ちたまふ

砂ほこり花のかをりを交へくる彌生の
街を君と歩める

人妻は旅なる遠き夫^せを思ひ姿つやけき
春彌生かな

君はいましづかに空を仰ぐらむかの水
莊の青葉のそよぎ

黄に匂ふ菜の花畑つゞきたる初夏の午
後の郊外に出づ

わが若きたましひにしみさゝるさゝる
夏はきたりぬほさゝぎす啼く

夏ざくらさびしく咲きし水無月の山の
ふもこの有明月夜

草の葉の強き光に吸はれたる瞳しづか
に涙ぐまれぬ

夜半ば吾らがよれる大木に月な、めな
り海遠く鳴る

わが手こりしづかに涙そゝぐ子のかご
こに交る夜の海かな

枕上まくらがみ君と寝し夜をさゝるきし山の瀬の
音の忘れがたかり

しとくくさ雨ふる山の朝の湯の湯ぶね
にひたり君が髪みる

遠き旅こゝろにゑがく港出の夜の汽笛
のうら悲しさに

電燈の暗きがもこのわが膝に君額を伏
す終りの電車

たそがれの厨の君のたすきぶりはるか
に思ふ暮る、雨の日

硝子戸に初冬の日光のながる、をみ居
つ、晝の湯ぶねにひたる

こゝろよく湯ぶねにひたり初冬の晝の
こゝろをひさり味ふ

ひるぐさ湯ぶねに充ちし湯をみつ、
こゝろしづかに君をおもへる

君もみる吾もみるなり黙したる二人が
なかの爐の冷へし灰

ふさわれにかへれば白くわが膝に君が
涙のながれてありけり

やすらかに吾らをいだき死の國にいざ
なうものよ汝が手によらむ

手をひらきわれらを待てるものあらむ
空のあなたの國なつかしむ

あはたしくまた死を思ふ思ひ倦みな
すべき術もあらぬこゝるは

したしさは劣らずあはれとこしへに背
さ呼び妹さ呼びえぬふたり

床に入りなほなぐさます忘れず悲し
き戀を阻はむとする

しづやかに白き花咲く大づらのかなた
の國のなつかしきかな

かへりみて捕へごころもなき夢のわれ
らがなかにたゞよひてある

さきの日に倚りにし柱いまはまた冷た
きものさなりはてしかな

うなだれてわが獨りゆく河床の松の林
にひぐらし啼くも

あかつきの木立の露にそほぬれてはる
かに匂ふ朝の海みる

しらくご明けゆく空に啼きもせぬ白
鳥のあり海のおかつき

あけがたの眠りし海の上を吹くゆく春
の風初夏のかぜ

背を向けしひさのかざしに照り映ゆる
灯に交るをちかたの海

ふるさをいづくと思はむ生れし地は
われのよるべくあまり冷たし

うつ、なく抱かんとして大衆のなかの
ふたりと知りしおどるき

蟲啼かす戸にふる君がくる髪にしづか
に秋の灯のながれたり

忍び逢ひやがてしづかに別れけり水道
ばたの秋の夜の月

窓の外は夜半の嵐ぞすさぶらむしづか
にわれら夢をつくる

悲しきはつくくばうし残されし蟬が
啼くなる野に今日もきぬ

ひろびろと野に充ちたらふ日光のなか
に病みたる身はうたふかな

電柱に風鳴る夜なり言葉なくわかれし
人のなつかしきかな

おごそかに吾らをめぐる運命ののがれ
がたきを知りそめし春

松の根にれんげ草咲きすみれ咲き山の
真晝に風通ふなり

千鳥きてなぎさの蘆に啼き交すゆふべ
さなればこゝる痛める

風落ちぬ雲もしづかに落ちゆきぬいま
暮る、海を君さわれみる

春の日の淡々^{あはく}しさよ捨てられしたまし
ひのゆくかたを眺むる

草枯れし海のほそりのきりぎしの松に
身をよせ夕風を聴く

暮れそむる夕空をゆく鳥のありすさみ
しまゝのわがこゝろかな

世の常のうつりかはりぞ悲しけれいつ
しかに老ひいつしかに死す

寝さめたる枕に遠くひびきくる夜の電
車の音のさびしき

紡績の裏をながる・水ぬるき溝渠の夜
の淡き瓦斯の灯

山々に楓の花の咲くころの海の闇夜を
忘れかねつも

夏はきぬはじめて人を海ぎはの闇に誘
ひし夏めぐりきぬ

命死ぬばかりに泣きて泣寝入る髪にさ
びしき夜の灯かな

夜は更けぬ火だれわづかに残りたる火
鉢の鐵に觸るゝ冷たさ

大ぞらのいづくに鳥の羽うつやしづこ
いるなき月の來りけり

蟲の音の聽へぬころさなりにけり草原
にきて月を眺むる

一月の夜のしめやかき鉢植の灯かけの
梅もやいにつぼめる

晝はわがひなに埋れ夜は夢に相抱く
あはれ物憂き姿

あたゝかき春のはじめのストーブに君
さよる夜を降るあられかな

膝に寝る君の可愛しおそろしき昨のこ
ゝろにかへりたまふな

窓の外の櫓の大木に風の鳴る夜半はも
悲し獨り寐ぬれば

春の日の充てる二階の一室にしづかに
ひさり針はこぶらむ

思ひあぐみよればゆふべの姿見に涙さ
びしきわが瞳かな

君が家の裏の空地の月光を二階の窓に
よりに眺むる

四辻に月ありすさぶこがらしのなかを
しづかにわが電車ゆく

願れば茫漠としてながめ得ず君も夢な
りわれも夢なり

冬のかぜはらゝはらゝとこぼれくるさ
びしきひとの髪をしが思ふ

月に近くか、やく星のさびしさよ煙も
立たぬ街の夜のそら

電車なき線路の遠く走れるを見居つゝ
月の夜を佇める

かの青き空の底ひに通ふべきひとすぢ
匂ふ初夏のかぜ

別れきて涙を思ふ身に吹くやなでしこ
の香を送りくる風

やうやくに窓より窓の白布より夜の歩
みよる人去りしのち

はらはらと落葉散りくるいたましくこ
ゝるふさがる夕となれば

枯草の嫩草^{わかさやま}山のいたゞきにわらびを摘
めばいにしへのしのばゆ

くづれたる築地に添ひて咲ける花その
山吹の花をあはれむ

右二首奈良にて

短夜調

君をみじ押へられたる蝶に似るいたま
しき子が髪を思はじ

蝶の羽に刺されしピンのいたましき君
の自由をなみするものよ

黒髪は少女おとめのごとく匂へどもさあらぬ
君が眸のおさるへ

あるときはいかづちのごとおどるかる
許されがたき君なりしかな

なぐさむる言葉も今は盡きはてぬ悲し
みよ來よ君を守らむ

吾ならで誰ぞよく君を愛すると思ひ悲
しきひと一人得つ

神に似て清ししづかに瞳をつぶり許さ
れぬ子を忘れむとする

死ぬ日までかくはたゝよひたゝよはむ
吾らが戀はあくところなく

おもひ遂にはてなき身なり戸によりて
夕の雲のみだるゝを見る

胸底のまことの憂よく知るや嫉みごさ
のみかりそめに云ふ

海を背にかほりすがしき髪をみる波よ
來りてさく吾ら引け

海匂ふ髪また匂ふあめつちに充ちし憂
のながに死なまし

世になにか空しからざるものありや涙
は出づれ空を仰ぎて

あめつちの今日はいづくをさまよふや
わがたましひは歸りきたらす

春の夜の月は洗みぬたちわかれひそり
ひそりの家にかへらなむ

荒々しく云ひしひそ言それにつぐ強き
言葉のあらぬがなしさ

さかしらに批を入れられて昂然と見上
ぐる眸よ月もうつさず

からかはれ笑はれ家を出でいきぬ月を
みれどもなぐさみもせず

月のぞく夜天がもごには、からす腕を
まきて君の唇吸ふ

十年前わが知らぬ日に妻となりし君の
若さをなつかしむ宵

かたはらに戀しきひごのあたゝかく添
ふとし思ふ春の日の前

わがのぞむかたにしたがひおさなしく
ほゝにみたまふ君にくちづく

おさなしく羽をさめたる蝶のごと君は
眠れりわがかたはらに

ひごつ家に寝れども枕ならべ得ぬこの
まゝならぬ世をすてむとす

いさげなくかよはき吾にすがり泣く許
されぬ子がやつれたる髪

秋の朝みはてぬ夢の果敢なさをつくづ
く思ふみだれたる床

ながくこ疊の上に寝そべりて思ひに
沈む君をながめぬ

色もなく香もなきものゝ一つあり行き
つくしたるこゝるの前に

秋の日の午後のかすけきものづかれう
すき日かげに物を思へる

月の夜の暗さよすだく蟲の音をかきわ
げ君と歩む初秋

別るべきさきの待てるを思ふさき明け
やすき夜のうらまれてきぬ

この君は冷たしさきにみづからを忘れ
て吾の腕によらしめ

年老ひし驛夫の頬に迫りたる夜の停車
場の暗きさとし灯

涙落つわかるゝさきの迫りくれば木立
に月の白くのぼれば

歸るべき徑^{みち}みゆと云ひかなしげに君よ
る窓のありあけの月

露結ぶ小草のなかを別れゆく二人の影
に白きありあけ

おどろきてさびしき辻に別れけり逢ひ
しばかりに夜の更けしかな

なやましき女の肌のあたゝかみ瞳にき
てこゝろ沈めるゆふべ

盃にうかぶおもかけさもすれば吾を忘
れて茫然と見る

あかあかさ入日に染みし晩秋の樹の間
に風のしづかなるかな

鐵窓をへだてゝみたる月ならすされど
冷たき夜のそらのいる

消息を書き終りたるつかれたる瞳もて
みやりぬひこり寝る床

こゝろふさたち去りがたくなり
にけり
青葱の畑のゆふぐれの風

櫛とりてさびしき髪を梳けるさま夕風
のなかに思ひ返がきつ

かなしげに夜の音楽の音ぞ起るかなし
きかたにまたこゝろゆく

大ざらに孤獨の光たゞよひぬこゝろ逢
ひて夜をかへるみち

辻馬車の濡れたる幌にしらしらさ月あ
かりして更けゆく街路

運轉手やすげにされる樞手ハンドルにかなしく
見入る夜更けし電車

君連れて明日は都にかへるべき今宵の
月のかなしめる色

思ひ倦み家を出づれば大ぞらは冷然と
して星のかけやく

十二月つめたく澄みし青ぞらを亂して
落葉散りしきるあり

頬を撫でいけむりさびしく空にゆく冬
のゆふべの巻煙草かな

夏の夜の大木の梢に月ありぬ逢引の子
の沈める瞳

あたいかき膝に泣けども清かりし童貞
の日の涙にあらず

違くみゆ都のそらの灯あかりの悲しき
まゝに別れかねたる

ひさり寐てさびしかりきさわが耳にさ
やくひさをつさいだきける

ひさり寝る床と思へば味氣なしまたひ
たすらに忍ばるゝかな

あはれ夢いだかんとしてつと伸べし腕
むなしく闇を打つなり

夜半の床ひさり枕に流涕すいよく
のめぐる深きに 闇

起き出づればまたさりけなく吾のあり
昨夜のこゝろを思ひかなしむ

みぐるしき涙のなかの姿をば罵る寒き
朝さなりける

瞳を瞑ちてそむきしひさを容るゝてふ
ならひしげくもなりそめしかな

唇も手すらも觸れすわかれたる夜の
大ざらの星のつめたさ

ぬかるみにまみれし青き草の上日の照
りくればもののさびしき

大晦日日くれの街の賣出しの旗に觸れ
たる君が髪かな

朝の峰しきりに霧のながるるをたはあ
る君が髪の上に見る

みいでたるかへでの花ののひと房にゆ
ふべしづかに風のわたれる

濡髪に山吹の花かざしたるあての姿を
忘れたまふな

何ごとも知らぬ冷たきたらちねにいだ
かれて寝る君のいたまし

訪ひゆけば夕闇のなかに灯もつけすむ
なく椅子によりたまふなり

思ひ出でて食事なかばに落したる涙を
ぬぐふたらちねの前

われとわが涙をぬぐふ指先のふるへに
もみゆ遠びさのかげ

春の雨な、めに河の濁水にそ、ぐなみ
つつ人をしる思ふ

人知れずさびしく山の峽かひに咲くひさも
と棕櫚の花をかなしむ

世に二なき仇さも思ふ日の交りその一
人の忘れがたかり

涼しげに撒水車ゆくゆふぐれの濡れた
る地を女歩める

立枯れの木立のなかを一すぢに電車走
すなりゆふ月かゝる

手をさりてなぐさめごころをつゞる間も
瞳ははなたざり黒髪の上

やすらかに母と枕をならべたる姿が夜
半の闇にみゆなり

秋の蝶われらふたりが酒宴の卓のあた
りを飛びめぐるかな

妻振りのうつくしきひさの手に見入り
しみく秋を感じけるかな

つと裂けし氷のなかより出でてこし言
葉のごとき冷たき言葉

身を動せばつめたき闇が頬を撫づる君
を待つ間のゆふぐれの室

深洗と女ひさりに更けてゆく夜汽車の
隅のうらさびしけれ

ダリヤ咲くはじめて君を許されしなつ
かしき日さなりにけらしな

濁れる花

君を離れ窓よりみたる深更の街路の上
の月のしたたり

狂ひ咲たれし花にいだかれて眠りの
國に走るひとさき

なつかしき少年の夢の終るころ身のた
しなみのやくづれゆく

玉のごとわれをいだきて抱きしむるい
さ大ひなる手の戀しさよ

かいいだき吾にやすけき夢を許すくる
髪びさの肌のはためき

胸のあたり淡く汗ばみ熱したる瞳のい
るに灯は輝きぬ

思ふさまわがくちびるをさいなめよお
もふがままに吾をいだけよ

瞳を瞑ぢて身を投げだしぬいかんとも
したまへ君が柔き手に

君と吾の外にこの夜を誰あらむ何を夢
みて涙ぐむ子ぞ

君あらず聞のつめたき戸をひらき夜半
の月を眺めけるかな

投げやりし命の末にまつはりてうす赤
き花の敷咲くゆふべ

あかつきの莊園に咲く白いろの花をめ
ぐりてのがれゆく夢

人知れず今日は昨日のあかるさを怨む
さびしき身さなりにけり

夜更けてあがりし雨のこゝろよさ冷た
さに身をひたしつくしぬ

花散りしあさのごさくもいつしかにこ
ころさびしきものさなりける

わづらはし抱ける腕のあひだよりもの
あり君を許さずと云ふ

泣くにさへ君はさころをほりかりぬ誰
がをきてつくりし掟なるらむ

水もて來かはきはてたる身になほも髪
まつはれりベゴニヤの花

雨に濡れかなしみに濡れあはたしく
こころ來りぬ君がかひなに

夢のごさくづをれてわが手のうちにさ
さへられたる君なりじかな

いまのさき狂ひたる瞳がしくくさ泣
きて訴ふあはれなるかな

君あはれ狂奔の夜のたゞなかに悲しき
戀をおもひ出でしや

瞳やや濁りを帯びぬ眺めやる世人みな
がら明るきはなし

放埒の灯のもさにありてこし身に秋風
のいたくかなしく

ほしいままみだるるままに亂したるこ
ころの空を吹く秋のかぜ

かるらかに身を秋風の吹きぬればわが
たましひもやるせなきごと

いちはやく今年は秋を知りそめぬいた
めることの身に多ければ

白き花小さく咲ける窓ぎはに思ふこ
ころの秋かぜの音

秋いかにさびしかるらむ花さへも小
く白く咲き出でにけり

わかれたる夜の停車場の暗き灯に身も
たましひも投げてやらまし

身を襲ふ夜半の嵐のすさまじさしづかに
寐れて君はあるらむ

瞳にみへす耳にきこへす神か悪か君と
われとを境するもの

膝の上に眠りに入りしたましひのその
柔さ重さかなしさ

ながくそのたましひが横はる本能
の前の黄なる灯のいる

あたたかき膝にわかれてかへらなむ悲
しや戸の面雨さんざ降る

樋つたふはげしき水の音夜は更けぬ途
にわかるるさきのきたりぬ

灯をかざし二階の窓に見送れる君の姿
の前に雨降る

俤より夜ふけの空の星くづに見入りて
思ふ君が身の上

ダリヤ咲くたま〜君と連立ちし廢園
の奥の秋の風かな

落髪をかなしむ人の手をとりて今日な
がめたる初秋のそら

君かなし泣きはれし瞳に月をうけ眞球
のごとく笑ひたまへば

背を向けて髪をつくらふうしるかけそ
の朝明の艶なりし君

君をすて家すてて遠き國にやるわがた
ましひの洗めるあけぼの

階段のなかばに立ちて省みる部屋に灯
瞳し君泣けるみゆ

手をとりて歸さずと云ふ君が瞳のうる
みに白くかゝやける瓦斯

窓の外に残りの風の鳴るをきゝあかつ
き近く床に入りける

丘にきの丘には秋の草立てりその草に
寢て月をながむる

君が窓深沈として更けゆきぬ外は十五
夜月あかりして

夜半もなほ戸の面は瓦斯の明るかりこ
の闇にゐて君をいだきぬ

風吹けど葉は散りくれど知らぬ顔わか
たはらを秋はすぎゆく

ひともさのダリヤの花に迫りきて曇り
し空の重きゆふぐれ

このままに朝のきたらすとこしへに吾
らを闇のつつめよと思ふ

たゞ一つ淡くのこりしあけがたの闇の
灯に涙かき出づ

人去りしのちのふすまの冷たさよつと
耳に入る秋の蟲の音

つややかに君が髪こそ匂ひぬれ満座の
なかのわが思ふひさ

卓上に秋の灯は照り灯は光り石のごと
くも君黙したり

かなしきは鏡に君がむかふときその落
髪の頬にちるとき

ゆふぐれのうすら冷たき風に似しもの
あり君さわれをさきける

みづからの命を食むと思はれぬするど
く吾に思ひ入るとき

生くるさふそのみなもこの冷たさに涙
が出づれ秋のくれがた

かまきりの青き羽に照り草に照り水の
ごさくも流れくる月

秋かぜは月のすき間より忍びきぬひさ
り寝の夜のこころの冷たさ

頁繰る右手のおゆびを傳ひきて身體に
寒し秋の夜の風

騒しき隣二階の三味の音さびしく君は
盃をさす

あたたかく白く大なる^{てのひら}掌にまた酔ひし
身をよせにけるかな

盃を重ねむさする手を押へわが奔放を
君は止めぬ

遠きかた海の方よりたへすたべす吾を
うかゝふ瞳の恐ろしさ

罪と云ふ世の罪はみな犯しきぬ人より
君をうばひしもそれ

京都にて詠める

加茂川の河原の青き草にきて比叡を
しの嘆くゆふぐれ

勇とふかのみやび男の夢のあさ祇園を
吹ける秋の風かな

秋のかぜれむれる獅子の背を吹きぬ噴
水の氷白きゆふぐれ

冬近き舞妓の夢もさびしけれ厚おしる
いに風の當れば

あはたゞしく紅燈のかけなのがれきて
四條の橋に水をながむる

この一卷と共にわが少年を送る

いまにして省みると、私は多く短歌によつて、自己の藝術欲を充ててきた。文章によらず、詩によらず、この古典的な、特有の形式の藝術に、さしたる反抗をも起さず、不自由をも極端に感ずることなく多分の努力と工夫をそゝいできたのも、或ひは少年の思想の比較的單純であつたためであらう

と思ふ

しかし、いま少年とわかるゝことを以て、
自分は永久にこの小さい眞球のやうな藝術
を忘れてゆかうとは思はない、自分がその
全人格を傾げんとする何らかの事業の餘技
として、そこしへにわが生存の一部の陰影
としての生命を失はしめざらむことをのぞ
む次第である、

終りにこの小さい著書の出版に就て、友
宮飼榮、宇崎純一、永岡勝成の諸氏の少な
からぬ勞を深謝する

明治四十三年十一月

十八歳の秋 著 者

明治四十三年十二月廿五日印刷
明治四十四年一月一日發行

定價金卅五錢

不許
複製

著者 百田 楓 花

發行者 大阪市南區東櫓町十九番地 田中 卯三 郎

印刷所 大阪市西區本町通三丁目亮十二番屋敷 大阪 聚文 舍

印刷者 大阪市西區本町通三丁目亮十二番屋敷 森 田 丈吉

大阪市南區道頓堀筋辨天座西

田 中 書 店

發行所
發賣所

大阪市東區備後町五丁目

登 美 屋 書 店

宇崎純一氏著 (近刊)

妹の巻

四六判新装

定價未定
郵税未定

スミカズ畫集

著者はたゞおもひでに生く、悲しくなつかしきすべての音楽と詩は、たゞ著者の純なる筆に於てのみうら若き人々に提供さるゝであらう

發行所

大阪南區戎橋筋
演舞場隣

エミヤ書肆

年末多忙の爲十分の注意を拂ふ
あたはず、假名遣ひ其他の誤りに
對し讀者諸賢に深く謝する次第
なり

著者